

■ 君の名を ■

見知った姿だ。変わっていない。誓いを背負った外套、まっすぐに伸ばされた背中、迷いのない歩み。

バゼットは立ちどまり、声をあげた。

「——言峰」

言峰がふりかえる。

喉元にまでせりあがってきたつかえが、言葉になりきらない声となる。

風がやってきて、葉ずれの音がわきあがる。言峰がこちらに向かつてなにかを言うが聞きとれず、それでもバゼットには言峰が自分の名を口にしたのが判った。追い求めてきた表情だ。美しさと醜さを兼ねそなえた、尊大で、こちらの心を知りつくした笑み。

ふたたび走ります。太陽の光が目にもぎれこみ、すべてが白く染まる。そのまま止まらず、言峰の傍、体温の中へ。肌に触れると、なつかしくそして記憶に染みついた感触に出会う。

自分の振舞いは滑稽だと思われるかもしれない。そう思うほどに、求めてしまう心のほうが大きくなっていく。わからないことばかりだ。あれだけ身のおきどころにとまどいを感じていた自分が、言峰には迷いなく身をまかせてい

る。

「こんなところにまで来たか」

声が低い振動となって伝わってくる。

「ええ。とても——遠かった」

出会いが偶然だったせいだろう。予想だにせず、限りなく無に近かった可能性が実ったおかげで必然以上の喜びが芽生えている。ともすれば危険な感情だ。たとえそれが破壊への道標でしかないとしても、運命という言葉を一瞬でも信じてしまいそうになる。

言峰の手が頬に触れてくる。わきおこる痺れに悲愴な決意が呼び覚まされる。自分がどうなろうとかまわず、たとえ代償が痛みであったとしても、この男とともにありたい

——

バゼットが抱いた望みは、この光とおなじく、冷ややかに刺すようなあたたかみを持っている。